

チベット高原の旅①

シベリア・中央アジアの視点から

加藤 九祚



はじめに

私は十数年前の一九八〇年初夏、中国の成都（四川省）から飛行機でラサを訪れ、五日間滞在し、まだ観光客の少なかったボタラ宮やノル布林カ離宮、大昭寺、八角街、ビール祭りなどを見学した。また同じチベット文化圏のブータンにも旅行したことがある。その後私は、チベット文化とシベリア・中央アジア文化との間に関連はあるのか、との疑問をずっと抱きつづけてきた。チャムとよばれる宗教的仮面舞踏でマスクが多用されるが、こ

れとシベリア諸民族のマスクとの間に関係はあるのか、鳥葬という独特な葬法はゾロアスター教系の葬法とつながりがあるのだろうか、などなど。

一九九四年夏、かねてからの旅仲間たちとともに年来の念願であった二度目のチベット旅行を実現することができた。今回はジープによる西チベット横断旅行で、前回のラサ旅行とは段ちがいのきびしさであり、結果的には調査どころか、命をまっとうして帰ってくるだけで精一杯であった。以下は、この旅行の簡単な報告である。

一、クンルン（崑崙）山中に入る

一九九四年七月二十七日、毎日ぎらぎらと照りつけて、例年になく暑い東京を出発、成田の空港から中国東方航空で上海へ向かった。いよいよチベット旅行への出発だ。西チベットは標高が高いだけに、ふつうの旅とはちがう緊張感からのがれることができない。私は高山にそなえて、すでに一週間以上も好きなアルコール性飲料を飲んでいない。

上海ではすでに大阪空港発の関西組が到着しており、私たちは上海旅行社の彭さんと、今回の旅行に最後まで同行してくれる新疆旅行社の韓建新さんに迎えられた。これで日本からの総勢二十六名が勢ぞろいした。韓さんには数年前カラコルム・ハイウェイのフンジェラフ峠越えのときも、その前のトルファン旅行のときも世話になっており、久しぶりの再会であった。日本語もずっと流暢になって、ガイドとしての貫禄もそなわってきたことを感じた。韓さんは旅行社の上司王さんといっしょに一九九四年五月、私たちの今回のコースの下見旅行をして

いた。

上海では西郊賓館という広大な敷地のホテルに泊まった。かつて毛沢東が上海にきたときには、ここに宿泊したという。玄関口に「睦如居」という草書の額がかかっている。庭の植込みが広く、ホテルの建物の裏の池では鯉が泳ぎ、大きな鶴が立ったまま口ばしを水中につっこんで餌をさがしている。

七月二十八日朝、新疆ウイグル自治区の首府ウルムチへ飛んだ。ここでは二年前に一泊しただけの豪華な環球ホテルに泊まった。昼食は新疆旅行社の若いウイグル人の社長の招待で羊のまる焼き一頭をふるまわれた。しばらくぶりで飲んだ。その日、カシユガルへ飛ぶ予定だったが、飛行機の「技術的理由」で予定変更、翌日早朝、カシユガルへ向かい、以前にも何度か世話になった色満ホテルで昼食後、小型バス二台で、西チベット旅行の出发点である葉城（カルガリク）へ向かった。ひどく暑かった。途中、ナイフで有名な英吉沙（ヤンギヒッサル）の道ばたで買ったスイカの味は格別だった。

葉城の町の少し手前で、ヤルカンド川にかかる橋をわ

たった。長さは四〇〇メートルくらいあるように思われた。このあたりのヤルカンド川はクンルン（崑崙）山中からの雪解け水を集めて、濁流が大きな中洲をはさんで渦まいて流れていた。橋の写真を撮ろうとしたら、どこからともなく警備兵が現われ、大声で制止した。

葉城の招待所に着いたら、ラサのチベット青年旅行社から青蔵公路、西域南道を経由してすでに到着しているはずのジープ九台とトラック二台（一台は燃料用、一台はテントと食糧および私たちの荷物用）の姿はまだなかった。トラックはその夜もついに現われず、翌三十一日の昼前、青年旅行社のガイド石さんに乗せたジープ隊の先頭車が到着した。石さんは若い漢人であるが、チベット語もよく話すという。あとで本人にきいたら、会話はできるがチベット文字の文章は読めないと言えた。

私たちは、ほっと胸をなでおろした、とにかく出かけるめどがついたのだ。石さんは、私たちに「途中水害で道路がこわれていたためにおくれた」と釈明した。それから一時間あまりして残りのジープ、それよりまたかなりおくれてトラックが着いた。ジープはすべてトヨタの

ランドクルーザー、トラックは旧ソ連モデルの中国製であった。ドライバーたち（チベット人と中国人）が疲れているので一夜休んでもらい、八月一日午後四時頃やっと葉城を出発することができた。予定よりまる一日おくれたことになる。

葉城にはカシガルのものに劣らぬほどの大きなモスクがあり、夕方になると、モスクの前の大バザールがにぎわった。食べものの店が多かった。飲食店は暗くなつてから開くようであった。ウイグル人、中国人が混じって住んでいた。

出発の日の午後は格別暑くなってきた。葉城の町はそれに、私たちのルートである新蔵公路（つまり新疆からラサへ通じる道）の起点があった。ここから先、一キロごとに里程の標柱があり、起点からのキロ数が書かれている。

はじめの五〇キロは舗装された平坦な道で、両側は砂漠だった。それからはすべて砂利道で、七〇キロの地点あたりから一木一草もない谷間に入り、しだいに登りになった。あたりのげ山も、春の雪解けのとき二週間く

らい緑になると韓さんが説明した。高度二二〇メートル。山はだはタクラマカン砂漠からの砂塵によつて白く厚くおわれ、風のために空は白く、遠い山は見えなかった。葉城から小さなオアシス集落を三つ通過し、高度二六〇〇メートル、ちょうど一〇〇キロの地点にウイグル人の小集落があった。粘土をのせた平らな屋根、粘土の壁、全体として旧ソ連の中央アジアで見慣れたつくりだ。ラクダの群も見える。二十戸ほどだから、人口は百五十人ほどか（子どもが多いから）。やがて、とがった高い山が見えはじめた。標高三〇〇〇メートルのクティ峠でも、風で砂塵が舞いあがり、全体がかすんでいる。砂塵はクンルン山中のかかなり奥地まで山はだをおおっていた。言わば「山岳砂漠」とも言えそうだ。

クティ峠の頂上あたりで二人の中年のウイグル人牧夫に出あった。彼らは夏の間、クンルン山中でラクダを放牧して過ごすという。ラクダは四十頭ほどだったが、強風をさけて、風の方に尻を向けて一カ所にかたまろうとしていた。キャラバンのラクダも砂漠で同じ行動をとると思われた。牧夫たちは風下の谷間へラクダを追っていた

ていた。牧夫たちは、私たちのジープの中にスイカがころがっているのを見て、札束を見せながら、高値で買いたいと申し出た。韓さんは、「スイカは私たちの命の綱だ、だからだめだよ」とことわった。スイカは山中に入るほど貴重品であった。

峠の頂上付近でも、背中と尾だけが白い鳥が飛びかっていた。つづら折りの道を下って、夕方八時ヤルカンド川の溪谷へ出、九時半兵舎のあるクティの集落に着いた。もはや暗かったが、砂塵のせいで星は見えなかった。集落には二、三軒の零細商店もあり、ポプラとヤナギの茂みが目についた。カラスもいた。遮断の棒が道路をさえぎり、パスポートの提示を要求する検問所があった。あたりは二九〇〇メートル、ヤルカンド川の岸辺であった。その夜はクティの人民解放軍の兵舎に泊めてもらった。男性は二階で二人部屋、一階に女性は四人部屋。食事は私たちが到着してから兵隊がつくってくれたものを食べ、十二時に就寝。

八月二日七時起床。二重窓のむこうに、岩盤に砂塵を盛ったような高い山がそびえていた。部屋の掃除はゆき

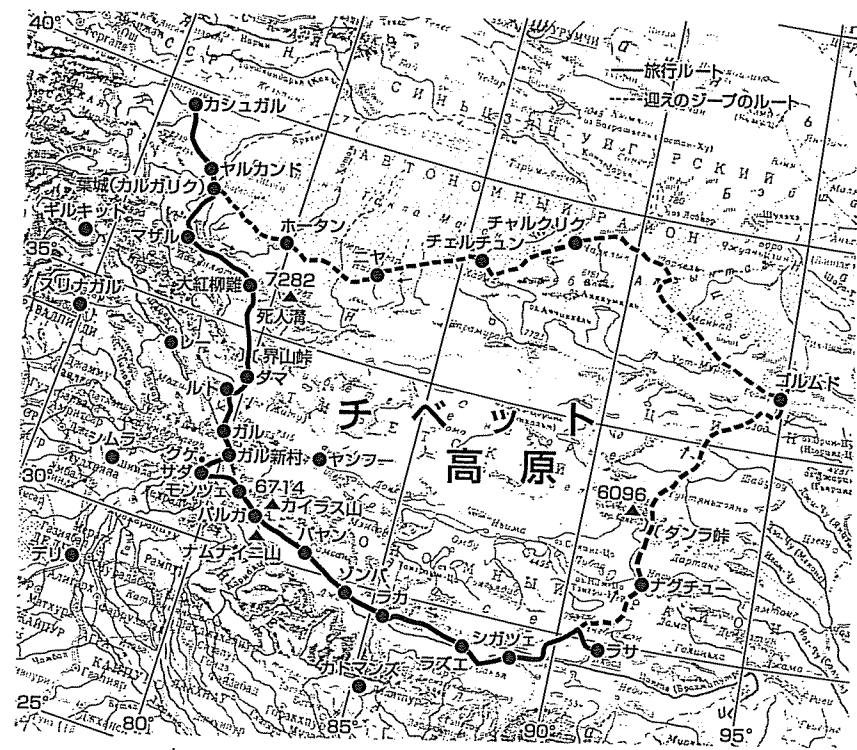


図1 チベットの旅 ルート概念図

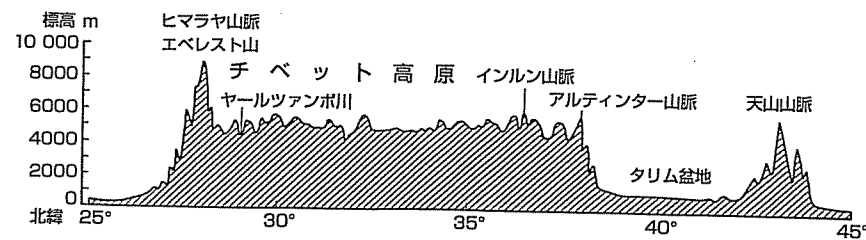


図2 東経87°の南北断面

とどいていた。すべて兵隊たちの仕事であった。

九時四十分出発。垂直に切り立った山麓をヤルカンド川が流れている。川沿いに進んだ。

葉城から一七八キロの地点で最初のラブツエ（チベット語。モンゴル語ではオボ。峠や集落の境界に小石を積みあげ、まんに棒を立て、その周りに小枝を配し、経文を印刷した布切れ「タルチョク」を巻きつけたもの）に出あった。まんなの棒は一般に「生命の木」と考えられている。まだ本来のチベット自治区までは遠いが、チベット人がつくったものであろう。後に、チベット自治区に入ってから、いたるところで見かけた。これについては少なからぬ論文があるが、以下に、ブリアートの研究者ゲラシモワの研究を紹介しよう。（「チベット人の伝統的信仰」一九八九年）

ラブツエとオボは、チベットとシベリアを結びつける最も重要な文化要素であると考えられる。天神が山に降臨した話なども北方的と考えられる。以下の文章には、またラブツエ（オボ）に積まれる石、そこに立てられる樹木の民族学的意義が解明されている。ラブツエ（オボ）はチベットだけでなく、モンゴル高原、シベリアのブ

ヤート共和国やトゥワ自治共和国などに広く分布している。もう一つ、ラブツエの中心柱の上に、ワシやタカ、フクロウなど鳥類の彫刻をとりつけたものもみられる。

ラブツエ（オボ）について

ラブツエ（オボ）については十八―十九世紀の二人のモンゴル人学者による基本的著作がある。一人は十八世紀前半、ウラト部族（アラシャン北部）出身のモンゴル人メルゲン・ディヤンチ・ラマのもので、もう一人はハルハ族のロブサン・ノルボ・シェイラブがチベット語で書き、一八六七年、彼の著作集の一部として北京で刊行されている。ロブサンはラブツエ（オボ）には五種類があり、うち四種類がチベットにあるとのべている。

メルゲン・ディヤンチの著作はモンゴル語で北京で公刊されたが、オボに二種類あるとのべている。一つは高い山上にある「王の」もの、もう一つは氏族のものである。ボーデン Bawden は一九五八年にその一部を翻訳している。

ロブサンはチベットの高僧パドマサンパワに依拠して

チベットの四種のラブツェを説明しているが、ラブツェなる言葉が「石積み」の意に相当するのは二つの場合だけで、他の場合は一般に「信仰の場所」および礼拝の対象をさすとのべている。

第一のラブツェは、山の頂上に、ゲルマ(万有の物質的、精神的実体の要素)に依じての国家の繁栄のために、またあらゆる面から平和な生活を確保するために建てられる国王のラブツェである。ここには王族の神話的先祖の意味がこめられている。チベットの支配者は神々と人間の第一祖先の流れをくんでいる。チベット王族の起源については、さまざまな伝説があるが、その一つに東西南北を代表する四人兄弟の神に関するものがある。ゲラシモワは、ハールフ Haath (一九六九年)の研究に基づいて、つぎのように紹介している。南方、ザムプリン大陸に向かった末弟のヤブラー(父なる神)から六神が生まれ、そのうちの若いオデグン(神的な四人の女性と結婚し、三十五人の息子をもうけた。長子から九神(Uta shan)が生まれ、ヤルルンク王朝の第一先祖神はこれに属する。四番目の子から八神(Ku shan)、末子から六神(Bod shan

rdung shan)が生まれ、人間である十八のチベット氏族は、これに起源している。

ハールフによれば、ヤルルンク王朝の王たちは天神の化身であり、その第一先祖であるニヤチ・ツァムボは天から「神の山」に降りたとされている。こうして第一種のラブツェは、それが高い山頂に構築されたものであれば、天神の中の神話的先祖に献げられたものであり、山という觀念そのものも、具体的な山というよりは、むしろ王権の天神的起源という觀念を示している。ロブサン(著作では、チベットの仏教学者たちがヤルルンク王朝の天神的起源に関する伝承を認めたが故に、この種のラブツェが仏教的立場で説明されている。

二つ目のラブツェは権力、家畜、戦利品などの奪取による威力強化のために、支配者、司令官らによって高地に建造されたものである。これは、ゲラシモワの研究によれば、支配者を埋葬したクルガン(古墳)の上になてられたものだという。ヤルルンク王朝のクルガン墓葬はヤールツァンボ川下流部とその支流の流域にある。モンゴルでも、オボが山の斜面にあるホシユンの族長たちの

墓のそばに建てられることが、L・ヴィクトロワの資料によつて知られている。M・タートル・フォッセは山上にあるモンゴルの支配者、族長、シャーマンら尊敬すべき人びとの墓とオボとが結びついていることを指摘している。またオボと先祖崇拜との深い関係についても述べている。

第三のラブツェ(オボ)は集落の創始者のもので、石積みであり、人びとが殖え、食物の豊富を願うためのものである。このラブツェは第一、第二のものよりも古い。ブリヤートの資料で見れば、土地の「主人」の信仰であり、前シャーマン期、シャーマン期、ラマ教期の三期に区分できる。四番目のラブツェは「山道」につくられ、人びとの病氣や伝染病をなくし、安寧と幸福を増進するためのものである。これには、牧民が牧地の境界を示すためのものもある。私たちが今回のチベット旅行で主に扱ったのは、この系統のものが多くと思われる。

葬礼においては、石は死者の代理、霊の容器の役割を果たしている。石で墓をおったり、墓を石積みでとりまいたりしている。アルタイの積石クルガンは、よく知ら

れている。これによつて霊が、その範囲外に出ることを妨げるのである。石は供犠の対象であり得るし、ラブツェ(オボ)に、自分や家族の名において石をおくのである。この場合、石は生きた人の代理であり、生活の霊的、身体的生命力の部分を「吸収」している。一般に石には「魂が宿っている」とされ、それを割ったりすることは災いをもたらすと考えられた。チベットの『四部医典』では、土を掘ったり、石を割ったり、木を切ったり、水をよごしたりすることは罪とされている。さきあげたラブツェ(オボ)に関する儀礼書には石、木、土、水を侮辱した場合に罪の許しを願う折りについての一章がある。このほか、一部の石と木は悪霊の住家であると考えられている。また石は、それ自身信仰の対象である場合もある。それはリアルな先祖の体現者であったり、神話的族長の象徴的代理または氏族集団の守護者であったりする。神々や死者の霊を含むさまざまな霊の容器、または生きている人の霊のシンボルとしてである。

ドイツのチベット学者ノイマイアー Neumaier E.によると、チベット人の死後の住地にとって必須の要素は、

樹木と水と山である。葬制において、水を入れた容器を死者の枕もとにおくことは、よく知られている。中央アジアのホラズム地方でも、イスラム聖者の埋葬儀礼において樹木と水と石は不可欠であることが報告されている。チベットの儀礼書では、死者の奸悪な霊を調伏するとき、その霊に灯火、一ぱいの水、食物、バターの塊りをそなえる。水が生命の源であり、復活の手段であることは、よく知られている。突厥の葬礼用の彫像（石人）は、すべて東を向いて手に容器を持っている。この容器の水は、子孫において再生すべき霊のためと考えられている。これは容器を腹部に押しつけた南ロシアの中世ボロヴェツ人の石人にもあてはまる。

世界の多くの民族において、樹木は死と生命に結びつけられている。死者を木につり下げたり、樹木のウロに葬ったり、木のそばにおいたりしたのである。したがって神話や信仰において、樹木はなんらかの両価感情（相反する感情の共存）的霊の住家であるとされた。シベリアのハカス族では、子どもを欲する人のための呪術的儀礼において、ウイマイ・タスヒル山に住むウイマイ・イッ

ジェ霊の保持者が、小鳥の姿をした赤んぼうに血と肉を送っている。新月の夜行われる儀礼のために、白樺の若木を根っこごと引き抜き、それをウルタ（テント）の煙出し穴から運んでウルタの男側（入口から見て左側）におき、その下に白いフェルトを敷いて赤い茶わんに入れた白牛の乳を小机の上においた。この乳は処女がしぼったものであった。

白樺の枝には三本の糸にキイロダカラ貝と手製の青銅ボタンをつり下げた。その後、白樺を同じく煙出し穴から運び出して森に植えた。もし白樺が枯れなければ、その家庭に子どもが生まれると考えられた。

樹木は生きている人の霊を保管すると考えられた。プラノ・カルビニによれば、モンゴルの大ハーン、オゴタイの霊は樹木に保管されていた。「現皇帝の父オコタイイカンが、自分の靈魂のために育つように、というので、小さい林を残したのを見ました。カンは、誰もその木を伐つてはならぬと命じ、このため、その枝を一本でも伐るものは、わたしども自身見たことですが、ぶたれ、何もかも剥ぎとられ、ひどい目にあいます」（護

雅夫訳、桃源社版、一六―一七ページ）

ゲラシモワは、西モンゴルのサルトル Sartur 部族の間に近年まで、氏族分化の術語としてモドゥチュラ Modu-chula（文字通りには「樹木・霊」という言葉があったことをつたえている。媒酌の前、花嫁を選ぶときに、結婚するうえで、族外婚の氏族的障害の有無を確認するために、このモドゥチュラを調べたのである。民族学者 M・S・ウスモノワは、ハカス（族）において、白樺、松、落葉松、シベリアマツ、五葉松、ポプラ、ヤマナラシ、柳など氏族ごとの樹木信仰のあることを調査している。これらの氏族の木は出産、婚礼、葬制において一定の役割を果たした。例えば（墓の）死者の頭側に二またになった若い木の棹を立てた。その長さは死者の身長に合ったものであった。未亡人は七日間または四十日間「アハルイス」（白い友）とよばれる柳の杖について歩き、それを自分の寝所においた。つまり柳の杖は死者の代わりだったのである。

モンゴルのオボの中心柱は、スログ・シング（生命の木）とよばれる。「スマチリマニブラジュニ」という儀礼

書によれば、オボの中心柱に祖父、父母、その九人の息子たち（つまり三世代）の名前を書いた。これは人の目につかないように書かれたが、これなしにはオボは何の効力も持たないと考えられた。さきの儀礼書によれば、人びとの神的な保護者たちはもともとオボにいたのではなくて、天の糸 *dmu-thag* つまり中央の柱から他の棒に引かれた縄（紐）をつたって降りてくるのである。

二、高原地帯を行く

一八〇キロの地点で右手に雪の山々が見え、一九五キロの地点で標高三九〇〇メートル、マザル峠にさしかかった。まだ登りはつづき、標高四八〇〇メートルのところで、私の乗った一号車がパンクした。峠の最高点は五〇〇メートル、空気がうすく、呼吸が楽でなくなった。午後一時半、峠を下ってヤルカンド河岸のマザル兵舎に着いた。葉城から二四六キロである。あたりは谷間ではあるが、クティよりはずっと見はらしもよく、ヤルカンド川の流れをながめたり、手を洗ったりすることもできる。午後になると増水し、夕方ともなると濁流は渦を巻

いて流れる。夕食は兵隊のつくったお粥と野菜のため。あんの入っていない白いマントウは、ご馳走のうちだ。高山病の徴候を示す人が数人現われ、中には苦しそうな人まで出てきた。板床で着のみ着のままで眠った。

八月三日、まだ暗い六時頃出発。雪解けの前に難所を抜けるためだった。結構冷えこんでいる。はじめヤルカンド川沿いに、いくつも小流を渡った。早朝のためほとんど水はなかった。これが夕方になると、車で渡るのも危いほどに増水する。空には三日月がかり、星も見えない。二八七キロの地点で、ヤルカンド川の氾濫で路盤がずたずたに崩れた場所に出た。ヤルカンドの流れを上流に向かって右手に見て、左手から小流が流れこんでいる。昨日はまる一日通行不能で、解放軍の兵士たちが不眠不休で左側の岩盤を爆破して路盤を広げ、今朝はやっと通れるようになった。兵隊たちは道ばたに張ったテントで眠っていた。私たちの一時間くらい後になると、またもや路盤が水をかぶり、私たちのトラック一台が立ち往生してしまった。ガソリン車を残したまま進むことはできない。折角難所を抜けたのに、十時すぎまで待った。や

むなく、つぎの宿泊予定地、三十里営房で待ち合わせることにして、ジープだけで出発した。

三〇六キロ付近から、ヘイチャ峠にさしかかった。約五〇キロつづき、最高点は四九〇〇メートル、爆破作業のため途中から引返して、登りの急な旧道に出た。作業員のテントがそこに見える。風よけのために低く張り、まわりには石を積んでいる。韓さんの話では、多くは四川省出身の青年たちで、一日の賃金は二十元（日本円で二百円あまり）ほどだという。食事は、ほとんど野菜なし、粥とマントウが主食だという。私たちは旅行中、これが主食だった。一時すぎ、三一キロの地点で峠を越え、解放橋という名の橋を渡った。この高山でも、水辺には黄いろい花を咲かせた草が見える。

やがて右手に、下流部でホータン・オアシスをうるおすカラカシュ川の溪谷に出た。ヘイチャ峠の下りは小流沿いであつたが、この小流とカラカシュ川との合流点に、二十世紀初頭、ラダックのレーからホータンに抜ける最短路に沿った要塞シャヒドウラの廃墟が高い岩山の頂上に残っていた。ロシアの詩人、画家、思想家として著名

なニコライ・レーリヒ夫妻と長男のチベット学者ユーリ

（中根千枝教授の恩師）の一行も、一九二五年十月四日ここを通過し、記録を残している。ユーリはチベットにスキト・シベリア的動物文の影響のあることを指摘している。当時すでに崩れていたという粘土の建物は、跡かたもなかった。三三三キロあたりから、カラカシュ川の両岸は緑の草原となり、馬群がのどかに草を食んでいた。標高三五〇〇メートル。

シャヒドウラの廃墟から一五キロほど進むと、インドとの国境付近に展開している中国人民解放軍国境守備隊の司令部のある三十里営房に着いた。高山病の研究をしている軍病院もあった。ここの兵舎で昼食。私は、レーリヒの旅行記に、カラカシュ川原の玉（有名なホータンの玉）についての記述があつたことを思い出し、さがしてみたが、それらしいものは見つからなかった。二年前、敦煌からアルティンター山脈の北麓沿いにチャルクリクへ出たときには、ミールンの手前にたしかに多くの玉があつたのだが――。三十里営房では、西安の医科大学を出たという士官の階級章をつけた二十二歳の美人軍医に

出あつた。私たちの仲間の数人は彼女の診察をうけ、高山病の薬を買った人もあつた。

五時半出発。四三三キロの地点では、トルファン付近のゴビ灘に似た礫砂漠が広がっていた。九時、四七五キロの地点、標高四〇五〇メートルの大紅柳灘兵舎に着いた。これが今夜の宿泊地だ。兵舎はカラカシュ川の広い川原の右岸、道路沿いにあり、三方を山に囲まれていた。見たす限り樹木は一本もない。流れの向こう側には山がせまっている。食事は、バケツに入れたお粥と野菜の油いため。その夜は寝つく前、少々呼吸が苦しかった。便所仲間の檜原さんの体調が、かなり悪くなってきた。便所はいったん兵舎の門を出て、道路を渡ったところであり、夜間は結構冷たかった。水を飲まないと調子が悪くなり、飲むとお手洗に行きたくなる。

八月四日は、みなかなり疲れたので、トラックを待ちがてら一日休むことにした。私は何人かの仲間たちと裏のはげ山に登ったりして、なんとか高地に慣れようとつとめた。

八月五日、暗いうちに起き出して簡単に朝食をすませ、

六時に出発。七時半には標高四七〇〇メートルの高原に出た。あたりの山容はまる味をおびている。どんよりと曇っている。昨夜の雨の水たまりが氷結している。標高四九八〇メートル、広大な運動場のような平坦地に出た。死人溝という恐ろしい名の、高山病で有名な六〇キロにわたる峠道だ。右手に湖や三角形の岩山が見える。一本の広い道路が、全く生きものの見えない死の静寂の中を貫いている。右手に青空、左手に黒雲がかかっている。寒い。植物は全くない。五七五キロの地点で、甜水海兵舎の小さな建物が見えた。道路補修班の宿舎らしい。少し下って標高四六〇〇メートル。九時半頃、突然あられが降ってきた。天候は絶えず変化している。やがて平原に背文のごく低いヨモギのような葦が見えてきた。貧弱ではあるが、牧草地になっているようだ。十時半、六四〇キロの地点で砂利の平原になり、背中の白い鳥が見える。湖の岸边には水鳥もいる。電柱だけは距離と秒を刻むように、正確に五〇メートル間隔で果しなく道路わきにつらなっている。

檜原さんの容態は、悪化したようだ。いちばん新しい

ジープに優秀な若いドライバーを乗せ、それに仲間の本多さん、湯浅さんに同乗してもらって、檜原さんを今夜の宿泊地ガルの病院まで急送することになった。

大紅柳灘から二〇五キロ、標高五〇一〇メートルの地点がチベット自治区と新疆（クンリン）の境界をなす界山峠になっている。風はひどく冷たい。峠の少し手前で、はじめてチベット牧民の黒いテントに出あった。峠の頂上にラプツェ（オボ）があり、棒と木枝、絹地（ハタという）、乗馬の人物像と経文の印刷された赤、青、白の布切れ（タルチョク）が雑多にとりつけられている。ここで記念写真をとった。

こんどは雨になってきた。左手はるかに七〇〇メートルクラスの山が見える。葉城から八二五キロの地点で、斜めに鮮明な筋の入った面白い地層の山を背負ったダマ兵舎の前に出た。チベット人の老人や母と子が全く無表情で道を歩いている。ムギの畑が見える。このムギは、中国語でチンコウ、チベット語でチョンガという。チベット人の主食ツアンパは、このムギを煎って粉にし、バター茶で固めたものだ。今日の目的地ガルまでは、あと

二五キロ、順調にいつて五時間かかる。あたりの道は、わるくない。

バンゲンという名の大湖の岸边に出た。「表情ゆたかな」高い山々に囲まれ、水は青く澄んでいる。インド領と中国領にまたがっているという。見たす限り、一つの建物もない。日本の景観とは全くちがっている。ここにあるのは、ただ圧倒的な自然だけである。湖のときつき、道路ばたの小高い場所に立派なラプツェがあった。標高四一五〇メートル、一木もない。左手からたつまきのような砂あらしが襲ってきたので、あわてて先へ急いだ。

湖を過ぎてまもなく、ルト（日土）に着いた。天気がよくなり、はるかに雪の山が見える。自然ばかり見慣れた目には、人の住む集落は小さくてもなつかしい。実際、チベットの旅は旅びとに人里を恋しがらせる。ここで、新疆旅行社の配慮で私たちのグループに配備された無線通信車のガソリンがなくなったので、韓さんと石さんが交渉して解放軍から売ってもらった（この通信車はあまり役にたたなかったようだ）。

あたりには羊群も見えた。山の斜面には、その後もよく見られたネズミの木（ハイマツのように丈が低く、小さな島のように群生する。ロシア語ではモジエウエリニクといい、芳香があり、中央アジアでは儀礼用にも用いられる）が点在していた。これはルト付近ではじめて現われた。夕方八時半頃、一〇〇〇キロの地点を通過、ひた走りに走った。崩れかかった岩山が多かった。

ガルの町の手前、標高四一〇〇メートルの峠に大きなラプツェがあり、あきびんやハタやトルチョクが供えられていた。ガルの獅泉河（インダス上流）賓館に着いたときには、もはや暗かった。なぜか電灯がつかず、部屋割当て、食事などに時間がかった。予定より二日もおくれたので、ホテル側としてはキャンセルされたと思っただけだ。私たちよりも先に到着した檜原さんは直ちにガルの病院に入院した。今回の旅行を企画の段階から世話してくれた本多さんが、ずっとつき添っている。ほかの仲間たちも親身に看病したり、世話したりした。

八月六日は一日、ガルで休んだ。私は午前中、檜原さんを病院に見舞い、帰り道バザールに立ち寄り、町



ガル郊外のラブツェ

のはずれにある石垣を積んだ大きなラブツェの写真を撮ったりした。バザールには野菜類が意外に多かった。ラブツェにはヤクの角が山と積まれ、オムマニマドメフムというチベット仏教のお題目のチベット文字や仏の坐像を刻んだマニ石も多かった。このラブツェは、これまで見てきた中で最大であった。老若男女が手動のマニ車をまわしながら祈っている。昼頃、仲間の山下さんと再度このラブツェを訪れた。ひとりの少女は、お経の小冊子を手にも、読みながらまわっていた。

ガル(アリ)の町は獅泉河のほとり、小さな盆地の中にある。日本の総面積よりも広いガル地区(四十万平方キロ)の中心地だが、病院と役所、ホテルのほかには目ぼしい建物はなかった。歴史的にも西チベットの中心として知られている。大通りには数軒の日用雑貨の零細商店がならんでいた。一軒だけ、けばけばしい色の壁を張ったキャバレーのような店があった。私と山下さんの泊まったホテルの部屋には、お湯の出ないシャワーがあった。しかし、これは例外だったようだ。つまり大部分の部屋には、それもなかった。

八月七日九時すぎ、檜原さんと本多さんを病院に残したまま、後髪を引かれながら私たちは出発した。送りにきた本多さんは泣いていた。一路南下し、一一三〇キロあたりで山の間にぽっかりと平原と湖が現われ、ヤク、ヤギを放牧しているチベット人の数張りのテントがあった。標高四一〇〇メートル、彼らは高地の牧畜に適応した人びとで、中央アジアやモンゴルのステップの牧畜に比べて、よりきびしい条件のもとでくらしている。一九五九年当時、チベット社会は総人口の五パーセントが貴族、僧侶が一五パーセント、牧民が二〇パーセント、農奴が六〇パーセントを占めていた。今の制度は、どうなっているのだろうか。

雨雲が出てきた。三段になった建物の廃墟があり、なんだろうと思ひながら通り過ぎた。ガイドも知らなかった。ガル新村というところに五つほどのコンクリートの建物があった。途中、広い河原を渡るとき、トラックがエンコして引上げに約二時間かった。ここで持参のキユーリをまるかじりしながら昼食をとった。毎日が行軍中の兵隊なみのくらしだ。すぐそばに、直径二〇メー

ル、高さ五メートルほどの砂利をまるく積み上げたラブツェがあった。シベリアや南ロシアの古代遊牧民の残した古墳(クルガン)のようであった。頂上に小石の山と木枝、布地などが見える。川原から山道へ上がるところにも四角形のラブツェがあった(二一四八キロの地点。約八〇キロほど行程を短縮できるという旧道をすすんだ。五〇〇メートル級の峠を二つ越えたが、二つ目の峠で雨にあった。あたりは雨が多いのか、岩はだに苔がついている。この南のどこかに、屏風のようにインド洋の雨雲をさえぎっているヒマラヤとカラコルムのすき間があり、そこから湿気を含んだモンスーンが大量に吹きこんでくるらしい。

第二の峠を標高四六〇〇メートルまで降りると、ネズの群生地があり、はるかに西ヒマラヤの山々がのぞまれた。ガルから一八〇キロ南下した地点に、バル経由カイラスへ出る道と、私たちの訪問予定地グゲ(古格)城址のあるサダ県への道の分岐点があった。私たちはサダ県目ざして川床の道を下った。すでに夕方だった。昨夜の大雨のために道はずたずたに切れていた。道なき道を強

引に下り、サダ県まで五〇キロほどのところで、地盤が弱くてすすめなくなった。空はどんより曇っていた。またいつ雨になるかわからない。もう少し下ると、長い泥土の道があるという。雨でも降れば危険ということで、暗闇の中を分岐点の手前まで引き返し、水辺にテントを張った。夕食はガソリンで沸かした湯をつかってのインスタントラーマンだった。

雨が降ってきた。今夜大雨になれば、明日も目ざすグゲやピンヤン・トンガ遺跡へは行けなくなる。明日、無理して行ったら行つたで、帰るまでに雨が降れば、川床道路を引き返すこともできなくなる。ここまで来てグゲにも行けなければ、なんのための旅行だったかわからなくなる。雨が、うらめしかった。私はジープの中で眠ったが、足をのばすことができず、つらかった。それに夜は寒く、毛布もなかった。夜間、幸いに大雨にはならなかった。

三、グゲ古城址を見る

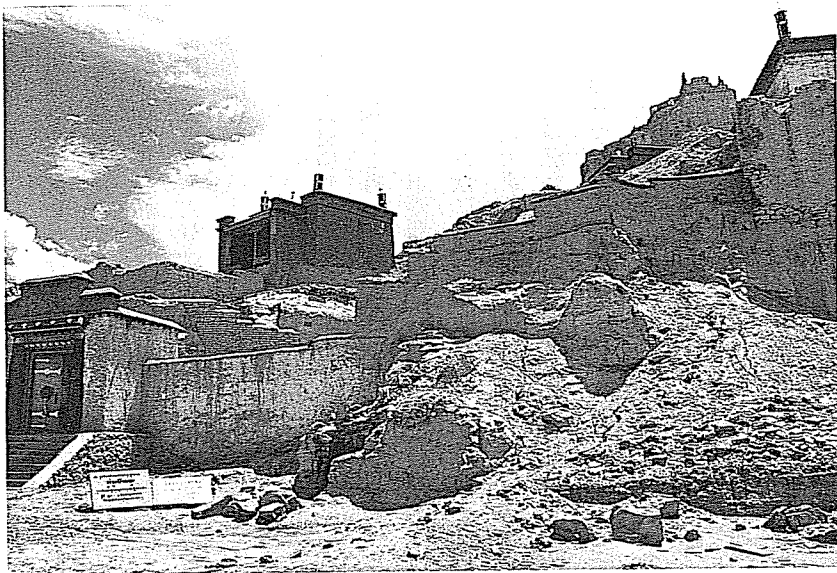
翌朝、旅行仲間全員の会議を開き、断乎としてグゲ古

城址のあるサダ県へ出ることに決した。運を天に任せるほかはない。ガイドもドライバーも心よく従ってくれた。八月八日十時出発。仏像が三段、四段に横に並んでいるように見える奇観（土林という）に見とれながら川床道を下った。天候は回復した。粘土道を見ながら、なるほどこれでは、雨になったらとても通れないと思った。一時四十分、象泉河（サトレジ）にかかる橋をわたり、サダ県の中心地サダに着いた。建物は大小全部で二十くらいだろうか。人口は周辺も含めて約七百人、サダ県全部では六千人ほどだという。インドの国境まで、そう遠くはない。この県役所で許可をもらい、観覧料を支払って二〇キロほどはなれたグゲ古城址へ向かった。よく晴れあがって、青い空と白い雲を背景に、粘泥岩でできたような山々がよく眺められた。

ジープで三十分ほどで古城址に着いた。管理人はワンラさん。シガツェ出身の五十一歳の共産黨員で、サダ県にある二十六の仏寺や遺跡を巡回しているという。グゲ古城址は、チベット西部で紀元十世紀中葉から一六三〇年に滅亡するまで七百余年つづいたグゲ王国の王城であ

った。この王国の成立をめぐる歴史は、日本の応仁の乱を連想させる。八四二年、仏教を迫害したダルマ王が殺害されて後、王家は二つに分裂した。そのきっかけは、王の第一妃と第二妃の争いであった。若い第二妃が身ごもったことを知った第一妃は、腹に布を巻いて、自分も妊娠したように見せかけた（後掲の『古格古城』には、以布纏身、偽稱有孕と書かれている）。月満ちた頃、おりしも生まれた実兄の子をわが子とし、以後二勢力は約三十年間争い、国は荒廃した。第二妃の孫が、西方アリ（ガル）地区へ逃れて、現地の豪族の支持を得てグゲ王国になったという。

城址は標高三七二〇メートルの砂岩の山上にあるが、全体の標高が高いので、あたりの地面からは二〇〇メートルくらいと思われた。宮殿、寺院、要塞を兼ねており、全体の設計はラサのポタラ宮と同じと思われた。相違点は、ポタラ宮は岩山にあり、規模が大きく、より壮麗に見えることにあると思う。城址は荒廃がひどく、いく分補修はされているが、そう長くない時期に崩壊すると思われた。白殿、紅殿、壇城殿、大威徳殿、度母殿など、



グゲ古城址の入口

多くの建物や軍事施設、寺院の廃墟などが麓から頂上までつづいていた。頂上にのぼるには多くの階段、トンネルを通らねばならない。一九八五年、大規模な調査が行われ、『古格古城』と題する二冊の報告書が一九九一年に文物出版社から刊行されている。これによると、古城の建物は多くの壁画で飾られていた。

入口の柱は黒、門扉は赤くぬられていた。柱一本のテラスのある建物は、中央アジアの家屋を連想させた。僧房だったらしい洞窟が、いくつもあった。天井に梁をわたり、彩色の文様で飾っているのも中央アジアのイスラム建築に似ている。シャカムニ（釈迦牟尼）の壁画のある四本柱のホールがあった。シャカムニの膚は金色、両側に小さく仏弟子が描かれ、そのまた右にはゲールク派（黄帽派）の祖ツォンカバ、左側には観音菩薩が描かれている。ある建物には紺色にふちどった「ノレン」が下がり、前足を折り曲げた牛が染めぬかれていた。壁面に大きな龍の描かれた部屋もあった。標高が富士山ほどもある頂上にもいくつかの部屋があり、その一つは中がまったく暗で、懐中電灯で照らすと、いくつかのインドに由来

故、以染面調伏」とある。染とは男女の肉体関係をさすので、染をもって染欲を調伏するとの意味にとれる。この状態を「楽空双運」というそうだ。これは後代になると、女性の相手なしでも「精神生理的な観想のみで同じ効果を經驗できるとされた」（山口瑞鳳による）。いずれにしてもこの修行法は俗にいう「止精法」「止息法」とも関連しており、凡人にとっては容易なものでなさそうだ。ただ形はどうであれ、男女相合を陰陽合一の現われと見、それによって万物が創られるとの思想は『古事記』にもみられるように、人類に普遍的であり、いかにもわかりやすいことは確かである。

*

グゲ古城の前にも、谷をへだてて二、三の信仰関係の小さな建物があった。またマニ石の山や、観音や歓喜仏をスタンプで打ち出した直径四―五センチの小粘土板がうず高く納められた洞窟もあった。これは、人の死後四九日の間に、死者の霊がよりよい世界へ行けるようにつくられたもので、洞窟内に保存されるという。

サダへの帰途、ワンラさんからチベット人の葬礼の話

する抱擁像が壁に描かれていた。不動明王もあった。中には四本の柱があり、四角形の壁ぞいにまわれるようになっていた。まん中で護摩をたき、加持祈禱をしたのだろうか、それとも密教の修行をしたのだろうか。ある地点には鉄製の小札（こざ）が散らばっていた。穴が九つあるのを拾えば吉兆という。

*

私は仏教史における密教の展開に興味をそえられる。仏教の正統派ともいえる密教において五戒の一つとして禁ぜられた「不淫邪」がヒンドゥ教の影響によって否定され、逆に性欲によって性欲を制するとする発想が、いかにも奇抜である。今で言う「逆転の発想」というべきか。深遠難解な大乘の教理と実践を一般民衆に近づける方法の一つとして性欲が選ばれたのである。私には、これが現代の風潮とも重なって見える。密教の奥儀である無上瑜伽タントラでは、行者は、初期では実際に、女性を悟得の手段として使ったように見えるが、専門でない私にはよくわからない。密教の主要教典の一つである『金剛頂経』には「奇哉自性浄、随染欲自然、離欲清浄

をきいた。道路の両側には中国語で砂棘という黄いろい実をつけた低木の茂みがあり、秋になると甘味が出ておいしいという。

ところでチベット人の葬法は、塔葬、火葬、天葬（鳥葬）、水葬、土葬の五つに分かれる。塔葬はダライ・ラマ、パンチェン・ラマほかの大活仏だけのもので、死後塩や香料を用いてミイラにし、乾燥させ、金銀銅など金属の宝塔に収めて、人びとの礼拝に供したものである。有力者の遺体をミイラにするのは、南シベリアのアルタイ地方でも、紀元前五世紀頃のパジリク古墳でも見つかっている。これは、人の死後霊だけでなく、身体もまた生きつづけるとの観念に基づいている。火葬は塔葬につぐ高級な葬法で、一般の死者には適用されない。天葬は最も一般的なもので、遺体を死後三日間家内に安置し、その間ラマに頼んで読経をしてもらう。それから専門の葬儀人に頼んで、山の岩場にある葬場へ遺体を運び、できるだけ早く猛禽に食べてもらえるように、斧を使って細かくしたり、ツアンパと混ぜたりして投げあたえる。鳥類によって食べつくされることは、死者のよき転世を意味

し、遺族の喜びとされた。チベット人は、ふつう人が死んでも泣かないという。死者がよりよく転世したと考えるからである。ワンラさんによると、鳥葬のあとに残った骨は粉末にし、赤い布に包んで地中に埋める。墓はつくらない。死者にともなう行事は、死後四九日をもって終わる。水葬は卑賤的な葬法とされ、幼児とか伝染病などで死んだ貧民の場合が多い。葬儀人が死者の頭部と膝とを縄でしばり、河辺まで運び、香木製の小刀で遺体を切開して水に投げるといふ。チベット人が鳥や魚を食べないのは、これらの葬法と関連があると思われる。土葬は最低の葬儀で、凶悪犯人や流浪の貧民の場合である。チベットには「土葬者は転世できない」との言葉があるという（『中国少数民族風情録』四川民族出版社、一九八三年刊参照）。

ところでチベットの天葬は中央アジア、イラン方面のゾロアスター教系の鳥獣葬の影響によるものであるのか、それとも独自に発達したものであろうか。独自説の人たちは、チベットには樹木が少なくて火葬にしにくい、また岩場が多くて土葬も困難である、そこではるかな昔

から天葬が行なわれ、それが仏教的観念と結びついて民衆の間に定着したという。しかし、フランスのチベット

学者スタンなどのように、ゾロアスター教の影響とみる学者もある。ただしゾロアスター教徒は死者を解体することはない。私は最近、イタリーの著名なチベット学者トゥッチがその大著『チベットの宗教』の中で、ゾロアスター教で死者の霊が渡るとされるチンワトの橋に相当する観念がチベット人にもあるとの指摘を知った（一九五ページ）。ゾロアスター教によれば、靈魂は不滅であり、死者の霊は死後、その生前の行為がはかりにかけられる。橋の下は地獄の深淵で、橋は善行者の霊にたいして広がるが、悪行者の霊のためには「毛髪のように」細くなつて、その霊を地獄に落とすとされている。ほぼ同じ表現がチベットにもあり、ゾロアスター教の影響は否めなという。とすると、部分的にせよ天葬にゾロアスター教の影響がないとは言えないのではなからうか（トゥッチは、上記の本ではこの問題にふれていない）。森安孝夫はマニ教徒やキリスト教（ネストル教徒のソグド人が六―八世紀に中央アジアからチベットへ入った可能性を指

摘している（『中央アジア史の中のチベット』『チベットの言語と文化』六二ページ）。これらのソグド人の中には中央アジア的ゾロアスター教徒も混じっていたにちがいない。

*

サダに帰って、今夜の宿泊地である兵舎の近くにあるトーリン寺を訪れた。入場料は六十五元、わりあい高かった。十一世紀にインドから招かれた高僧アティーシャはこの寺に留まり、史上有名な『菩提道燈論』を書いたといわれる。人口の少ないサダには不釣合なほど大きな寺であった。この近くに最近、朝日新聞などに紹介されたピンヤン・トンガの仏教遺跡があり、私たちもここを訪れる予定をしていたが、行っても閉鎖されて見せてもらえないというし、ガソリンも不足する可能性があり、天候の急変も心配であり、それに日程もすでおくれているので、あきらめることにした。ただし葉城で私たちと同じ頃出発した別の日本人グループは、部分的ながら見学できたことを、帰国後にきいた。彼らには日程の余裕があった。

八月九日早朝、サダを出発。六〇キロほど行くと同じ道を引き返し、バル経由でカイラスへ向かった。バルにはコンクリートの大きな一階建て兵舎があり、そのまわりは飛行場のように固くて平らな天然の大広場になっていた。バルから三キロ（葉城から二四九キロの地点）に縄を張った大きなラプツエがあった。バルを出たあたりは牧草の豊かな草原が広がり、電柱を支える鉄線にも経文を印刷したタルチョクを下げている。テント十張りほどの牧民集落を通った。

モンツェというわりあい大きな集落の入口に石橋があり、そこで車のタイヤなどに消毒液をかけられた。ガル方面にコレラの疑いがあるためという。橋をわたってしばらく走ると、二本に重なった虹が現われた。虹は車の先へ先へと移動し、なぜか決してその下をくぐらせてはくれない。葉城から一三〇〇キロの地点に増水した川があり、大丈夫かと危ぶんだが、無事わたり切った。今度の旅行を通じて、チベットのドライバーたちが増水した急流にジープを乗り入れる「勇敢さ」には驚いた。九時半頃、反対側からトラックが一台湿地にはまりこんでい

た。湿地が乾くまで待つのだろうか。右手に一部雲をかぶったナムナイニ峰が見えた。カイラス(カンリンポチエ山は雲のために全く見えなかった。十時半、バルガにあるカイラス山の登山基地カンデイス賓館に着いた。標高四六〇〇メートル、もはや暗くなって、あたりの景色は見えず、犬のほえ声だけがきこえた。十一時頃まで自家発電の電灯もあり、寒さの中を急いで部屋割りし、持ち合わせの食糧を食べて眠った。私は山下、小浜、窪田さんと同室だった。小浜さんと窪田さんは、女性だ。みんな四人部屋で、土間にベッドが置いてあった。夜半は冷たい雨が降り、いうまでもなく小用は男女を問わず庭先で済ませた。

八月十日、一日をカンデイス賓館で過ごした。雨雲は晴れやらず、カイラス山は遂に姿を現わさなかった。まゐる石が一面に散らばった広い川原には、巡礼者たちのテントとまる石を積み上げたチベット人の住居が点在している。山から溪流が流れ出ている。山と広い川原との境目の両岸に石を積んで柱を立て、それに縄をわたして赤、青、白のタルチョクを満艦飾のように下げている。

溪流を崇拝しているのだろうか、おそらくは悪霊の侵入を防いでいるのであろう。

十時頃からカイラス聖山を遠望したいと思い、近くの前山に登りはじめた。しかし途中から雨が降りはじめたので、いそいで降りることになった。仲間のひとり山下さんは、かなり上まで登り、その小寺に住むラマ僧から手製の弦楽器をゆずってもらった。彼の知人に楽器のコレクターがおり、依頼されたという。山の麓の川岸に、まる石を積んだ四角形の囲いがあり、その壁の数カ所はチョルテン(ストゥーパ)になっており、また壁の内側には大きな香炉、小仏像入りの御堂、マニ石の山などがあった。石垣の上には右まわりに風力計のようにまわるマニ車が幾つも取り付けてあった。マニ車には携帯用の手まわし、一カ所に設置した大型の手まわし、水力利用、風力利用などがある。水力や風力の利用は、祈禱に質よりも量の側面があることを示している。

敷地の一角に、入口に薪を積み上げた、まる石積みの住居があり、その中から赤い布地を肩にかけたラマらしい中年の男が出てきて、私を見て、家の中へ招き入れた。

居間と祈禱室に分かれており、居間では髪を一本に編んで背中に長く垂らした若い女性が釜の湯を沸かしている。

女性を私を全く無視して、表情も変えなかった。在家のラマ夫妻と思われた。アメリカのチベット学者クルンフェルトによると、一九五九年以前、チベットでは僧院のラマが全男性人口の二〇—三三パーセントを占めた。今ではラマの数はずっと減少していることは疑いない。祈禱室があり、大きな太鼓がつり下げられ、ミラレパとダライ・ラマ十四世の肖像がかかっていた。仏像もあった。なにがしかの札を置いてラマの住居を辞した。

昼食は、韓さんが賓館の料理人に特注したという五種類のおかず付き米飯だったが、標高の高いせいか、米は半煮えで、おかずもおいしいとは言えなかった。しかしとにかく食べなければ旅はつづけれない。この夜は、ドライバーたちは賭けごとをしらしく、翌朝私たちは早くから起きて用意したが、彼らが起きてこない。ガイドの言うことを真面目にきかないようだ。この賓館は一泊七十九元、大都会のホテルなみという。韓さんは高いと言って嘆いていた。結局、「あこがれ」のカイラス

は私たちの滞在中、山容を現わさなかった。(つづく)

参考文献

山口瑞鳳『チベット』上下 東京大学出版会、一九八七—八

長野泰彦・立川武蔵『チベットの言語と文化』冬樹社、一九八七

高山龍三『失われたチベット人の世界』日中出版、一九九〇
カルピニ、ルブルク著、護雅夫訳『中央アジア・蒙古旅行記』桃源社、一九六五

ユーゴスラヴィア・レヴュー社・中国上海人民美術出版社
編『チベット』ベースボール・マガジン社、一九八二

鎌澤久也『瀘沽湖畔のモン人』『季刊民族学』七〇号 千里文化財団、一九九四

范玉梅、吳碧雲、開斗山、游智仁、邛東『中国少数民族風情録』四川民族出版社、一九八七

安旭『藏族美術史研究』上海人民美術出版社、一九八八
西藏自治区文物管理委员会編『古格故城』上下 文物出版社、一九九一

馬書田『中国佛教諸神』團結出版社、一九九四

G. Tsybikov, Izbrannye trudy, I—II, Novosibirsk, 1981. (ツィンコフ選集)

E. G. Bazaron, Ocherki Tibejskoi meditsiny, Ulan-Ude, 1984. (チベット医学概説)

A. Tom Grunfeld, The Making of Modern Tibet, Zed Book Ltd, 1987.

K.M.Gerasimova, Traditsionnye verovaniya Tibetsev v kul'tovoi sisteme lamaizma, Novosibirsk, 1989. (ラマ教の信仰体系におけるチベット人の伝統的信仰)

China's Tibet, winter 1993 (A quarterly review of Tibetan news & views), Beijing, 1993.

(かとう きゆうぞう・創価大学教授)

研究覚え書き

キース・トマス『宗教と魔術の衰退』を翻訳して、魔術研究に関わるようになった。〈魔術〉を「悪魔」の「術」にしてしまったのは、キリスト教の宗教体系である。そうした押し付け的な要素を取り除くと、それは抑圧されるべき構造をなしていた〈知〉の形態、あるいは〈信〉の形態であることがわかった。最近ではそれを〈母系性宗教〉として位置づけ、抑圧的動きに出た形態を〈父系性宗教〉とする立場が現れてきた。これによると、何故〈魔女〉は〈女〉が圧倒的に多かったかが説明される。

今、能の「葵上」をこの点から読もうとしている。その際、漢字の解字的意味作用を徹底的に用いるつもりである。例えば「怨霊」という考えが鍵となるが、「怨」と「霊」の解字的意味作用はこうだ。怨(エン)は、人が二人からだを曲げて小さくまるくがんださまで、怨は心が押し曲げられてかんだ感じ、いじめられて発散できない

母系性信仰と父系性信仰について 荒木正純

残念な気持ちのこと。ちなみに「うらむ」は「心(ウラ)」が活用した語。霊は、巫と雪からできていて、雪はしずくの垂れる形。霊は、天から鬼神がくだってお告げをする(みこ)。この意味を合わせると、天からくだった鬼神のお告げをする、心が押し曲げられている巫となる。しかし一般に読み取られるのは、「うらみを抱いた霊魂」ということだ。

また「タマ」には「霊」も「魂」も当てるから、「霊魂」は「タマタマ」となる。この落差は、どうして生じたのか。過去のある時、〈タマ〉が「魂」にそして「霊」に当てられたのだ。この時の発想様式を再構築することがわたしの関心の的で、この「葵上」は、シャーマニズムと神道と仏教と修験道とが、混然とした状態を表象している。見通しをいえば、母系性信仰と父系性信仰の相補的關係とすることができ、こうした日本と西欧の信の体系を比較することが、現在のわたしの関心の中心にある。

(あらき まさずみ・筑波大学教授・イギリス文学)